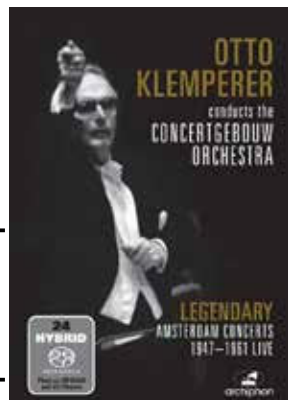


追加情報

クレンペラーとコンセルトヘボウ管の共演歴史を収録内容に沿ってご紹介いたします。

オットー・クレンペラー&コンセルトヘボウ管弦楽団 アムステルダム・コンサート 1947~1961 (24SACD)



【出会いは1917年の「さまよえるオランダ人」】

クレンペラーがコンセルトヘボウ管弦楽団を最初に指揮したのは第1次大戦中の1917年12月14日のことで、演目はワーグナーの「さまよえるオランダ人」。会場は中立国オランダの要衝であるハーグの「芸術科学館」という名の多目的劇場。

この上演は、ドイツのエルバーフェルト市立劇場総監督で演出家のアルトゥール・フォン・ゲルラッハ率いるオペラ興行「グランド・オペラのタバ」シリーズの一環としておこなわれたものでした。

ゲルラッハは、1912年からエルバーフェルト市のブラウゼンヴェルト劇場のアーティストとスタッフによるオランダ出張公演（オーケストラは現地で契約）を繰り返しおこなっており、オペラと演劇を数多く上演して収益を上げ、戦時中には中立国でのオペラと演劇上演ということで、ドイツ帝国外務省の支援も得られていました。

しかし、戦況の悪化に伴いドイツ政府からの支援が打ち切られると、演目を実入りの良いオペラに絞り、「グランド・オペラのタバ」シリーズと銘打って出張公演を再開、その最後の公演となったのがクレンペラーの「さまよえるオランダ人」です。ちなみに民営だったブラウゼンヴェルト劇場は、この1917年、財政難から市営となり「エルバーフェルト市立劇場」と改名しています。

ゲルラッハの公演には、ブラウゼンヴェルト劇場の第1指揮者になったばかりの若きクナッパーツブッシュも兵役中の身ながら1914年から参加。その際、批評が芳しくなかったこともあり、ハクをつけるためか、以後しばらく「プロフェッサー・ハンス・クナッパーツブッシュ」と記載。また、クナッパーツブッシュが担当したのは座席数1,250の「ロッテルダム大劇場」でしたが、クレンペラーやリヒャルト・シュトラウス、グスタフ・ブレッチャー（クレンペラーの元上司）らは座席数2,088の「ハーグ芸術科学館」で指揮していました。

ちなみに、ゲルラッハは、1919年にはエルバーフェルト市立劇場総監督を辞して、ドイツ最初の映画カンパニーである「ユニオン映画株式会社」の芸術監督に就任。その3年後の1922年には有名な映画カンパニー「UFA」に移り、映画監督としての活動を開始、「ファニーナ」、「グリースフース年代記」という表現主義映画を撮った直後に49歳で亡くなっています。

参考までにゲルラッハの率いた「グランド・オペラのタバ」の公演一覧を記載しておきます。ワーグナー作品が多いのは、1914年にワーグナー作品の著作権が失効したことによって訪れたブームと同じく、上演時の負担が少ないというのが大きな理由でもあります（同じ理由でブルックナー作品は1927年から、ブラームス作品は1928年から演奏回数が増加）。

グランド・オペラのタバ

1916年10月16日 ハーグ芸術科学館
「トリスタンとイゾルデ」
グスタフ・ブレッチャー（指揮）

1917年4月8日 ハーグ芸術科学館
「フィデリオ」
ウレム・メンゲルベルク（指揮）

1917年11月3日 ハーグ芸術科学館
「サロメ」
ヘンリー・フィオッタ（指揮）

1916年12月1日 ハーグ芸術科学館
「ローエングリン」
グスタフ・ブレッチャー（指揮）

1917年05月8日 ロッテルダム大劇場
「ジークフリート」
プロフェッサー・ハンス・クナッパーツブッシュ（指揮）

1917年11月16日 ハーグ芸術科学館
「ニルンベルクのマイスタージンガー」
リヒャルト・シュトラウス（指揮）

1917年1月9日 ハーグ芸術科学館
「ばらの騎士」
リヒャルト・シュトラウス（指揮）

1917年10月15日 ロッテルダム大劇場
「トリスタンとイゾルデ」
プロフェッサー・ハンス・クナッパーツブッシュ（指揮）

1917年12月14日 ハーグ芸術科学館
「さまよえるオランダ人」
オットー・クレンペラー（指揮）

【コンサート指揮者としての最初の指揮は1929年】

1929年1月、メンゲルベルク／モントゥー双頭体制下のコンセルトヘボウ管弦楽団に3日間客演したクレンペラーが選んだメインの曲目はブルックナーの交響曲第8番。すでにベルリン・フィルやゲヴァントハウス管を指揮して成功を収め、ニューヨークでも指揮するなど、クレンペラーにとって重要な曲になっていました。

そして同年4月の定期公演に出演できなくなったメンゲルベルクの代役として、再びコンセルトヘボウ管弦楽団を指揮することになったクレンペラーは、今度はマーラーの「復活」と「大地の歌」などを指揮。「復活」は1919年にケルン、1921年にベルリン・フィルと取り上げており、すでにクレンペラーの重要レパートリーとなっていた曲。「大地の歌」は1921年にケルンで男声版で指揮したほか、このコンセルトヘボウ客演の前月にはより連初演もおこなうなどやはり重要な曲。

しかしほどなく大恐慌の影響がヨーロッパにも波及することとなり、以後、しばらくクレンペラーは呼ばれなくなります。

次に声がかかったのは、5年近く経って大恐慌も終わりつつあったときのことで、メンゲルベルクの体調不良に困っていた「コンサートヘボウNV」(コンサートヘボウ大ホールや小ホールを運営する公開型有限責任会社)の理事会で、芸術監督のルドルフ・メンゲルベルク(指揮者のハトコ)が、多くの指揮者を1週間ずつ客演させるプランを提案。やがて遠くアメリカにいるクレンペラーのもとにも、1934年の3月に2週間客演して欲しいという要望が出されますが、クレンペラーは、1933年10月から音楽監督を務めているロサンジェルス・フィルでの多忙さを理由に断っています。

【戦後、盟友バイナムの時代に数多く客演】

クレンペラーが次に客演するのは、前回の客演から17年も経った1946年のことでした。前年の1945年にはコンサートヘボウ管弦楽団の首席指揮者ウィレム・メンゲルベルクとNV芸術監督のルドルフ・メンゲルベルクが共にドイツ絡みで失脚。翌1946年には不透明な人事の原因でもあったコンサートヘボウ管弦楽団とコンサートヘボウNVの癒着状態を解消すべく組織を分離し、1938年から首席指揮者だったバイナムがようやく本格的な実験を握るようになります。

ちなみにバイナムはメンゲルベルクとワルターからは快く思われておらず、1938年に首席指揮者に就任した際にも両名からは不満の声が上がっていましたが、クレンペラーとは芸風にも通じるものがあることから関係はうまくいったようで、戦後、クレンペラーが数多くコンサートヘボウ管に客演できたのはバイナムのおかげだったともいえます。クレンペラーが大火傷で死にかけたときもバイナムは快く代役を引き受けていますし、バイナム没後はクレンペラーの役職や体調の問題もあってほとんど客演が無くなってしまったのも象徴的でした。

【収録された演奏について】

Disc I

- メンデルスゾーン: 序曲「フィンガルの洞窟」Op.26
 - マーラー: 「さすらう若人の歌」ヘルマン・スハイ(バリトン)
 - ブルックナー: 交響曲第4番変ホ長調「ロマンティック」WAB104[ハース1944年版]
- 録音: 1947年12月4日

当日の演奏会曲目を全て収録。「フィンガルの洞窟」(8分41秒)は速いですが、ヘブリディーズ諸島がカムチャツカ半島あたりと同緯度ということで、北の海と島の寒々とした荒々しさの表現にはかえって良いかもしれません。後年とは違った良さがあります。

「さすらう若人の歌」(14分10秒)はクレンペラー唯一の録音として有名なもので、速いテンポを採用。バリトンのヘルマン・スハイはドイツからオランダに移住し、Hermannの最後のも「n」も削ってしまっているほどなので、ここでは姓もオランダ語読みにしておきます。曲中、交響曲第1番との共通素材が聴こえてくると、巨人が巨人を指揮しなかったのはとても残念と思わせる演奏でもあります。

ブルックナーの交響曲第4番(54分14秒)は、4年後のウィーン響との録音に次ぐ快速演奏。クレンペラーがこの作品の指揮で最初に成功したのは1934年のロサンジェルス公演で、使用したのは当時唯一の楽譜だった初版(レーヴェ版)でしたが、戦後は主に原典版を使用。もっとも、このコンサートヘボウ管との演奏では、ロバート・ハースが1944年に新たに校訂した原典版を使用していたものの、1951年のVOXレーベルへのウィーン響との録音では1936年のハース版を使用。1954年のケルン放送交響楽団との演奏では、前年に出版されたばかりのノーヴァク版を使用しながらも、第3楽章中間部最初の主旋律をオーボエに吹かせるというハースの1944年版に準拠。以後、1963年のEMIのセッション録音、1966年のバイエルン放送交響楽団も同じ状態なので、クレンペラーにとってはその響きが最も良かったということなのでしょう。ちなみにコンサートヘボウ管とウィーン響の録音では、第2楽章第2主題部のヴィオラ・パッセージを独奏で演奏させていますが、ほかではおこなっていないので、当時の一時的なアイデアだったものと思われます。その意味でもこの録音は貴重だと思います。

なお、1947年のクレンペラーは、4月から8月にかけてひどい躁状態となっており、以下のような事件を引き起こしています。
4月: ストックホルム・フィルとリハーサルで激しく衝突し、以後、7年間呼ばれなくなるほど関係が悪化。
5月: パリ・オペラ座で『ローエングリン』のリハーサルで演出家と衝突して指揮を拒否し、損害賠償25,000ドルで劇場を提訴。
6月: 恩人で親しい友人でもあるシュナーベルとメニューーインの演奏をリハーサルで侮辱してトラブルに発展。
8月: ザルツブルク音楽祭で初演を任されていたオペラ「ダントンの死」への興味を失って指揮をキャンセル。作曲者が連合軍幹部に気に入られて音楽祭の重鎮となっていた29歳のアイネムだったことから、以後、ザルツブルク音楽祭への出演機会が消失。ちなみに若きアイネムの作品は拒否したものの、マーラーの交響曲第4番とロイ・ハリスの交響曲第3番ほかのオーケストラ・コンサート、及び『フィガロの結婚』は指揮。よほどアイネムが気に入らなかったのでしょうか。おかげで代役のハンガリー人指揮者フリッチャイが有名になる機会を得ています。

そして9月、まだ躁の影響による体重減少からは回復しておらず、ハイな状態は継続していたものの、冷静さや判断力は回復。躁は軽度なものとなり、ブダペスト国立歌劇場音楽監督に無事に就任。十数年ぶりとなる歌劇場監督業務に精を出し、オペラ上演だけでなく、歌劇場楽団によるオーケストラ・コンサートも企画して辣腕を振うこととなります。

このコンサートヘボウ管弦楽団との録音がおこなわれた12月は、ブダペスト国立歌劇場音楽監督就任から3か月目で、軽度の躁の時期にあたり、活気のあるスタイルと、行き届いたコントロールの両立した良い状態となっています。

Disc II

- ベートーヴェン: 交響曲第8番ハ長調Op.93
- 録音: 1949年5月1日
- モーツァルト: 交響曲第25番短調K183
 - モーツァルト: ヴァイオリン協奏曲第5番長調K219「トルコ風」ヤン・ブレッセル(ヴァイオリン)
- 録音: 1951年1月18日

ベートーヴェンの交響曲第8番(24分11秒)は快速でリズムカルな、後年の演奏には見られないパワフルな音楽が聴きものです。1949年5月当時は軽度の躁状態は引き続き維持されていて、迷いのない音楽を聴かせています。

モーツァルトの交響曲第25番(15分49秒)は有名な激烈演奏。モノラルながら各パートが実に分離良く響きます。

面白いのはヴァイオリン協奏曲第5番「トルコ風」(26分25秒)。クレンペラーの勢いの良い力強い伴奏に対し、コンマスのブレッサー[1899-1973]が最初は実のどかに自己主張しているところで、その水と油的な掛け合いが面白くなってきます。ここでも軽度の躁状態がプラスに働いているようです。

Disc III

●ヤナーチェク：シンフォニエッタ Op.60
●バルトーク：ヴィオラ協奏曲 (SZ120, BB128)
ウィリアム・プリムローズ (ヴィオラ)
録音：1951年1月11日

●ヘンケマンス：フルート協奏曲
フーベルト・バルワーザー (フルート)
録音：1951年1月13日

●ファリャ：スペインの庭の夜
ヴィレム・アンドリーセン (ピアノ)
録音：1951年3月29日

ヤナーチェクとの交流もあったクレンペラーによる「シンフォニエッタ」(23分5秒)は、金管部隊による荘重な巨大さ、木管と弦による軽快な民俗的素材のコントラストが強烈。

クレンペラーはバルトークと交流があり、共演もしていましたが、現在知られている録音はヴィオラ協奏曲(20分9秒)のみ。ブルックナー交響曲第4番の第2楽章でヴィオラをソロにしてしまうくらいなので、ここでもプリムローズのヴィオラをたっぷり聴かせています。

ハンス・ヘンケマンス [1913-1995] は精神科医として働いたのち、作曲家、ピアニストに転身した人物。名手バルワーザー [1906-1985] が表情豊かなソロを聴かせるフルート協奏曲(14分3秒)は、聴きやすい作品。オランダは自国作曲家の紹介に熱心な国で、外国人客演指揮者もよく取り上げています。

ファリャ：スペインの庭の夜(20分18秒)は、クレンペラーには珍しい作品で、抒情的なこの作品としては快速なテンポで、作品構造を浮き上がらせるのが面白いところ。ピアノ・ソロのヴィレム・アンドリーセン [1887-1964] は作曲家としても有名。

Disc IV

●ベートーヴェン：シエーナとアリア「ああ、不実な人よ!」Op.65
フレー・プロウエンステイン (ソプラノ)
●ベートーヴェン：交響曲第7番イ長調Op.92
録音：1951年4月26日

1951年4月12日から5月7日までかけておこなわれたベートーヴェン・チクルスから収録された音源。オランダの有名ソプラノ歌手、フレー・プロウエンステインがじっくり歌い上げる「ああ、不実な人よ!」(13分3秒)に続いて「田園」が演奏されましたが、残念ながらその録音は無いものの、メインの交響曲第7番(36分)が遺されたのは朗報でした。絶好調クレンペラーならではの重量級で揺るぎのない見事な演奏を聴くことができます。

Disc V/1

●モーツァルト：フリーメーソンのための葬送音楽 八短調 K.477
●マーラー：亡き子をしのぶ歌
キャスリーン・フェリアー (コントラルト)
録音：1951年7月12日

マーラー没後40周年記念演奏会の前半は、フリーメーソンのための葬送音楽(5分3秒)と亡き子をしのぶ歌(22分35秒)を指揮。

Disc V/2

●マーラー：交響曲第2番八短調「復活」
ヨー・フィンセント (ソプラノ)
キャスリーン・フェリアー (コントラルト)
トゥーンクンスト合唱団
録音：1951年7月12日

この記念演奏会での「復活」は、直前のウィーン響との録音&実演と比較してずいぶんテンポが違っているので、クレンペラーの前後の行動状況を整理しておきます。

1951年5月のコンサートヘボウ管の演奏会シリーズの後、クレンペラーはフェスティヴァル・オブ・ブリテンに出演できなくなったジョージ・セルの代役として、フィルハーモニア管弦楽団を指揮して「ジュピター」などで成功を収めます。

6月にはクレンペラーはウィーン交響楽団とマーラーの「復活」の録音とマーラー没後記念演奏会、協奏曲(ノヴァエス)の録音などをおこなったのち、6月中旬からはウィーン・フィルとギリシャ・ツアーに出かけています。

7月にアムステルダムに戻り、12日と13日の2日間、コンサートヘボウ管弦楽団を指揮してマーラー没後40周年記念演奏会を指揮。

8月にはアルゼンチンとヴェネズエラに客演。

そして10月、モントリオール空港で転倒して左大腿骨頸部ほか数か所を複雑骨折し、しばらくは車いすでの生活を余儀なくされます。

クレンペラーは夏に躁状態になることが多かったようで、もしかするとギリシャ・ツアーの後に躁転してしまった可能性があります。前年12月にはコンサートヘボウ管弦楽団の演奏会で「大地の歌」でフェリアーと素晴らしい共演を果たしたにも関わらず、7か月後のこのマーラー記念演奏会では、フェリアーはリハーサルでのクレンペラーが酷かったと述べています。

背景はともかく、この超快速な「復活」も見事な演奏であることは確かです。

Disc VI/1

●ベートーヴェン：交響曲第6番ヘ長調Op.68「田園」
録音：1955年7月7日

1951年10月の複雑骨折の2か月後、入院中のクレンペラーは胸膜炎と肺炎の発作に苦しみ、抗生物質の反復投与のため弱体化して年末を過ごし、さらに急性胃痛に苦しむという状況に陥っていきませんが、春には松葉杖で歩けるまでに回復。4月22日にさっそく滞在地のモンテリオール交響楽団を指揮して高い評価を獲得。しかし翌日、若き日の恋人エリーザベト・シューマンの訃報に悲嘆にくれます。シューマンとは数日前に電話で話したばかりでした。

悪いことは続くもので、翌月、EMIと契約し、ヨーロッパに出かけようとしたクレンペラーを待っていたのは、アメリカ政府が新たに制定したマッカラン=ウォルター法による帰化外国人の海外滞在制限でした。当時のアメリカでは、ケネディも支持した「赤狩り」旋風が吹き荒れており、クレンペラーの職場がハンガリーだったことから共産主義活動の嫌疑をかけられ、また、なぜかナチ疑惑まで浮上してややこしいことになっています。結果、パスポートの更新拒否という処分となり、1953年12月に弁護士を雇っての交渉が実を結んで再び出国できるまで、1年半のあいだは北米限定での活動を余儀なくされることに。

その間、1952年7月のシカゴ交響楽団との共演は聴衆からも団員からも称賛され、娘のロッテも過去最高だったという意味のことをトッポ宛ての手紙に書くなど、良い出来事もありました（当時のシカゴ響音楽監督はクーベリック）。

1954年1月、ヨーロッパに戻ったクレンペラーは、まずオランダのハーグ・レジデンティ管を本拠地で振り、続いて彼らを率いてコンサートヘボウ大ホールでも公演をおこなって大成功を取め、以後、コペンハーゲン、パリ、エッセン、ケルン、ベルリン、ケルン、チューリヒ、フィレンツェ、ロンドン、アムステルダム、ケルン、ロンドン、リスボン、ハーグ、ベルリン、ロンドンと各地で指揮、年末まで多忙でした。

コンサートヘボウ大ホールでハーグ・レジデンティ管を指揮して成功したことは、1951年の公演後、クレンペラーを遠ざけていたコンサートヘボウの運営陣にとっても無視できない事態となり、さらにマリウス・フロトホイスが、次の芸術監督就任を狙って実績づくりのために動き、クレンペラーはさっそく1954年の冬の公演に招かれますが、これはクレンペラーの虫垂炎によってキャンセルとなります。

翌1955年1月、クレンペラーはスイスに帰国するものの、今度は前立腺が原因の膀胱炎となり、3月の緊急手術で良性の大きな腫瘍を取り除き、これによりクレンペラーの体調は急速に回復しています。

4月にロンドン、5月から6月にかけてケルンで仕事をしたクレンペラーは、7月のコンサートヘボウ管弦楽団の公演にも招かれていましたが、これをチャンスと見た娘のロッテは、それまでよりも大幅に高い出演料を要求して交渉に成功していました。

4年ぶりにコンサートヘボウ管弦楽団と共演することになり、さらに出演料の大幅アップも果たしたクレンペラーが指揮したのがこの7月7日のコンサートです（同内容で7月9日と10日にも演奏会を実施）。

このときのクレンペラーは絶好調で、「嵐」の凄まじい迫力などほかでは聴けないものです。

Disc VI/2

●シェーンベルク：「浄夜」(1917/1943)
●ヒンデミット：組曲「気高い幻想」
録音：1955年7月7日

クレンペラーとシェーンベルク [1874-1951] の関係は、クレンペラーがヨゼフ・マティアス・ハウアー [1883-1959] に対し、さまざまな助言をおこなって作品上演や出版に尽力し、結果的に12音技法の始祖にしてしまったことから、シェーンベルクに感情面でのしこりを残し、それは生涯続くこととなります。

クレンペラーの方はあまり気にしていなかったようですが、税金支援の無いロサンゼルス・フィル時代に、出資者たちを集めて説得するための会合で苦勞を数多く経験し、演奏会収益と真剣に向きあわざるをえなかったクレンペラーにとっては、12音作品はずでに関心外だったようです。

クレンペラーの「浄夜」は、ゴツゴツと緊迫して異様な高揚を見せ、通常の演奏とはずいぶん印象の異なるものとして知られています。ここで聴けるのは、浮気して子供出来ちゃったけど許して欲しいという女のムチャな言い分に対する、男の大袈裟な葛藤という情景なのですが、クレンペラーの演奏で聴くと8分あたりから恐ろしいこととなります。もっとも、それにはアルヒフォン旧盤 (ARC-101) の低音強調が度を越していたという問題もあると思うので、今回の新盤でどうなっているか、混信問題も含めて気になるところです。

続く「気高い幻想」は、神の道化師とも言われたアッシジの聖フランチェスコについての作品で、享樂的な人物が宗教の力で変貌し、やがて聖人に列せられるまでになるという話。

1955年7月7日のコンサートは、自然への感謝の「田園」、愛への感謝の「浄夜」、神への感謝の「気高い幻想」ということで、3つの感謝の音楽を並べた構成となっていますが、もしかしたらこれは、4年ぶりの復帰とギャラのアップを叶えてくれた芸術監督フロトホイスへの感謝という意味合いもあったのかもしれない。(N.K.)